複製品の展示活用

－古墳・壁画の複製品を中心として－

1　はじめに

本稿では「古墳・壁画の複製品を用いた展示活用に関する情報収集・分析業務」の調査（以下、本調査とよぶ）で収集した国内外の展示事例を紹介するとともに、壁画や石室の複製品の活用方法について考察する。本調査は修理作業が終了した後の高松塚古墳壁画の保存管理と公開のための新施設に向けて、文化庁からの受託事業としておこなったものであり、複製品を用いた展示の検討資料となりうる事例を収集することを目的としている。国宝高松塚古墳壁画は脆弱な文化財であり、公開方法や日数に制限があるため、実物展示の制約を補完し、見学者の理解を深める方法として、複製品を用いた展示の導入が検討されている。調査は国内外の古墳や壁画等の複製品を対象に、平成30年10月から平成31年３月の期間でおこなった。

2　複製品の活用

複製品は展示困難な脆弱資料の代わりや、他館への貸出期間における実物資料の代わりとして、博物館で展示されているものを目にすることが多い。また、海外の資料やアクセスの難しい遺跡、移動不可能な資料などを複製品により再現することで、より身近に、容易に文化財を見ることができる。実物の代わりとして複製品を使用することで、展示公開による資料の劣化や損傷のリスクを回避し、実物資料を安全に保管することもできるため、文化財の保存と活用の手段の一つとして有効であるといえる。複製品には、使用材料や資料の持つ情報を自由に選択できるという特徴がある。展示の目的に応じて活用の幅が広がることから、本稿では複製品を実物の代用品とするだけでなく、柔軟に活用が可能な展示ツールとしてとらえ、その有効性について言及したい。文化財資料が持つ情報は計り知れなく、文化財の持つ魅力を伝えるためには、実物資料の展示が望ましいのは言うまでもないが、複製品には複製品ならではの活用方法が存在すると考える。以下に、調査した複製品の活用事例とその有効性について述べる。

表５　視察施設一覧

	施設名	収蔵する複製品
国内	愛知県立芸術大学	法隆寺金堂壁画の模写
	大塚国際美術館	約1,000点の絵画陶板レプリカ
	関西大学博物館	高松塚古墳壁画の陶板レプリカ
	キトラ古墳壁画体験館 四神の館	キトラ古墳の原寸大石室模型、壁画の陶板レプリカ
	熊本県立装飾古墳館	熊本県内の主要な装飾古墳の原寸大石室模型
	五郎山古墳館	五郎山古墳の駆動式石室模型
	高松塚壁画館	高松塚古墳の原寸大模型、壁画の模写、一部復元模写、構造再現模写
	奈良文化財研究所 飛鳥資料館	高松塚古墳・キトラ古墳に関連の複製品
	ひたちなか市 埋蔵文化財センター	虎塚古墳石室模型
	武蔵府中熊野神社古墳展示館	熊野神社古墳の石室模型
韓国	漢城百済博物館	高句麗古墳の組立式石室模型、壁画模写
	国立公州博物館	武寧王陵関連の複製品
	扶余陵山里古墳群	１号墳東下塚の模型
イタリア	アンテロス美術館	絵画浮き彫り模型（石膏製・樹脂製）
	ウフィッツィ美術館	絵画浮き彫り模型（樹脂製）
	国立サンマルコ美術館	絵画浮き彫り模型（木製）
	ドゥオーモ付属美術館	金属製・樹脂製・石膏製の彫刻

過去を再現する展示　複製品の多くは、資料の外見を写し取り、現状を再現したものである。しかし、現在は見ることのできない、過去の状況を伝える資料としての複製品の活用も有効であると考える。例えば、現在、キトラ古墳壁画は石室から取り出され、施設にて保管されているが、飛鳥資料館が所蔵するキトラ古墳壁画の陶板レプリカは、取り外し前の石室内での様子を鮮明に再現している（図50）。当時の様子を伝える手段として写真や映像も存在するが、立体物として再現することで臨場感という要素が加わる。当複製品においては、漆喰の崩れ落ちそうな状態を体感することができ、なぜ壁画の取り外しをおこなう必要があったのか、文章での解説や写真を見るよりも明確に分かりやすく伝えることができる。

空間を体験する展示　文章や写真では伝えきれないもののひとつに、規模や空間がある。原寸大石室模型は、古墳の規模を感じられる有効な展示といえる。空間を再現することで、古墳の規模や構造を身体で感じることができる。また、愛知県立芸術大学の法隆寺金堂壁画模写展示館では、壁画模写を実際の金堂内部と同様の配置に陳列している（図51）。展示室内は金堂の柱や梁などを詳細に再現している訳ではないが、解説を受けずとも、金

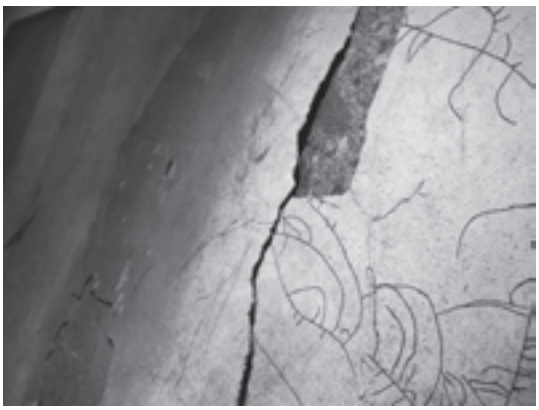

図50　再現された浮き上がる漆喰の様子
（飛鳥資料館　キトラ古墳壁画陶板レプリカ）

図51　展示室の様子
（愛知県立芸術大学　法隆寺金堂壁画模写展示館）

堂内部での壁画の位置関係を容易に理解することができる。

実物資料では不可能な展示　例えば、実物の石室を半分に切断して見せたり、絵画に強力な光を当てることはできない。しかし、複製品であれば実物のデータをもとに目的に応じた形で製作し、様々な展示手法を用いることが可能となる。福岡県五郎山古墳館では、カットモデルとして古墳の構造を伝えるとともに、羨道を通り石室に入る体験ができる石室模型を展示している。飛鳥資料館では、キトラ古墳壁画の天井壁画の陶板レプリカに映像を投影することで、天文図を分かりやすく解説している。このように、複製品は実物資料の制約から離れ、展示に合わせた構成や形式で製作が可能であるため、展示の幅を広げることができる。

海外での複製品の展示活用　韓国の漢城百済博物館には木製組み立て式の高句麗壁画古墳の模型が所蔵されている（図52）。石室の規模は日本のものと比べて大型である。漢城百済博物館における組み立て式の石室模型は、ドイツで開催する展示に向けて製作されたものであり、搬送時のことを考えて解体できるように設計されている。各壁面、各部材はひとつの大きさも巨大であるが、解体できるため収蔵庫での保管もしやすいという利点がある。壁面には紙に描かれた模写が木の板の上に貼られている。木製の模型は温湿度に配慮する必要があるため、多湿な日本には向かないが、組み立て式という発想は、保管や活用に有効である。漢城百済博物館では、所蔵している126点にも及ぶ高句麗壁画の模写を、自館での展示のみならず、国外へも貸し出しており、国内外に対する積極的な活用をおこなっている。

また、イタリアのアンテロス美術館では、視覚障害者向けに、平面である絵画を半立体化した展示がおこなわれている。専門の訓練を受けた解説員の案内のもと、このレリーフに触れることで絵画の内容を把握できるよう工夫された、触れるための複製品である。複製品は触覚で理解しやすいよう、一部をデフォルメしたり、表面の質感を変えて衣服と肌の差を表現するなどの、細かな工夫も施されている。このような視覚障害者向けのプログラムは、当館の他にも複数のイタリアの博物館で実施されている。

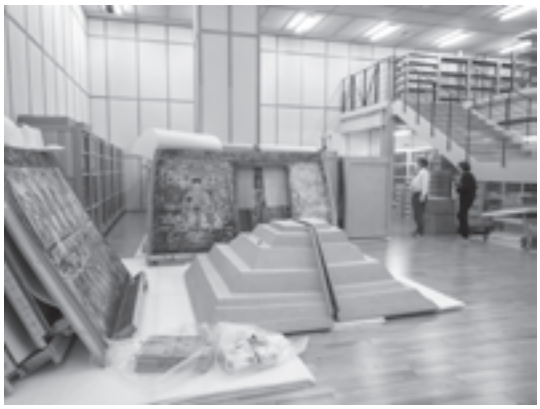

図52　組立式石室模型の収蔵状況（韓国漢城百済博物館）

3　まとめ

以上のように、複製品は活用の目的に合わせて多種多様な応用が可能である。複製品を作る際には、実物と全く同じ外見の製作を目的とするだけでなく、人が内部に入る展示であれば強度の高い材料を選び、触れる展示であれば質感の再現性にこだわり、持てる展示ならば重さを正確に再現するなど、目的を明確にして材料や方法の検討をすることで、複製品はその意義を高めることができると考える。

複製品は、一般の見学者には軽視される傾向にあるが、実物の代わりとしてだけでなく“複製品でしかできない”活用の方法も存在する。文化財の保存と活用のためにも、今後さらに有効に活用されるべき展示手法である。

なお本稿の執筆には、石橋茂登、宇田川滋正、金旻貞、中田愛乃、西田紀子、森井順之、若杉智宏の協力を得た。

（荻山琴美）